

「学校つまらない?」いや「つまる」

新井 宏

『本郷』という歴史雑誌がある。安政四年（一八五七）創業、歴史・考古学書で有名な出版社、吉川弘文館の隔月広報誌である。

吉川弘文館は戦後まもなくから日本歴史学会（現会員八千名）の月刊学術誌『日本歴史』発行を担当し現在八四一号を数えている。『本郷』は平成七年に『日本歴史』の評論、資料、広報の部分を独立させた有料誌で、私の最初の著書『まぼろしの古代尺』を出版してくれた縁で今でも無料で送付してくれている。

その頃、吉川弘文館から著書を出版できるのは、その分野で実績のある研究者に限られていた。だから大学の先生方でさえ吉川弘文館から出版できると勲章にしていた。その中で、無名のアマチュア研究者の著書を出版してくれたのであるから如何に私が喜んだかは判っていただけであろう。

その『本郷』には、なかなかユニークな歴史評論が載る。主に吉川弘文館の出版書に関連するものであるが、その一三四号（二〇一八年三月）に小松成美氏の書いた「世界一大切にしたい会社」との記事があった。

実は彼女の著書『虹色のチョーク』について紹介する宣伝なのであるが、異例なのは出版社が吉川弘文館とは縁もゆかりもない自費出版で知られる幻冬舎であり、著者も歴史研究と縁のないノンフィクション作家だということである。彼女の主な著書を調べると、中田英寿、イチロー、白鵬、五郎丸などのスポーツ選手評伝が多い。

しかし、彼女の紹介記事を読んでいる内に、時代の流れを知った。主題が障害者の雇用問題なのである。近年、歴史研究の対象が社会的な弱者、少数者、たとえばジェ

ンダー、性差別、性的少数者（LGBT）などに広がるなかで、障害者にも目を向けた歴史研究の新しい分野が形成されつつ有ると言っても過言ではない。

すなわち、「世界一大切にしたい会社」とは、二〇〇八年の坂本光司氏の著書『日本でいちばんたいせつにしたい会社』で紹介された日本理化学工業というチョーク製造会社のことなのである。現在の従業員は八十名ほど、その内の七割が知的障害者で、更にその半分ほどが重度の障害者、特にチョーク製造のラインで働く社員はすべて障害者が担っているという。著者の小松成美氏は、この会社で四年半密着取材してこのノンフィクションを書いた。まずは小松成美氏の『本郷』に載った記事から紹介しよう。

小松氏は日本理化学工業の大山隆久社長に質問する。

「本当に失礼かも知れませんが、細かな作業マニュアルを読むことやコンピュータを使うこと、計算をすることができない社員の方々が、こうして優れた技術を身につけ、日本のチョークの半分以上を製造していることに衝撃を受けています。どうしてそれが可能になったのですか？」

大山社長は次のように説明した。

「チョークを作る障害者達の頑張りのお陰で、国内チョークシェアでナンバーワンにもなることができました

た。社員には、地域の最低賃金を下回ることなく、給料を払い続けています。重度の障害があっても、企業の貴重な労働力となることを証明していると思っています」

その始まりは、今から五十八年前、現会長の大山泰弘氏が養護学校の先生から何度も何度も何度も請われ、十五歳と十六歳の少女を「二週間だけ」という条件で「就業体験」として受け入れたことにあった。

「申し訳ありませんが、うちでは無理です」と断るなかで先生は言った。「就職が無理なら、せめて働く体験だけでもさせてくれませんか？ そうでないとこの子たちは、働く喜び、働く楽しみを知らぬまま、施設を出て一生が終わってしまいます」と。

心配する先生や父母たちがそつと見守るなかで、二週間の「ラベル貼り」作業が終わった。十時の休み時間、お昼休み、三時の休み時間も仕事に没頭して、手を休めない姿に、一緒に働いていた社員たちから声が上がった。「私たちみんなでカバーしますから、採用してあげてください」と。

以後、その人数を増やし、重度障害者多数雇用モデル工場となる。

「知的障害者でも働けるようにと、工場のラインを劇的に変えていきました。すると、そこには想像を越えたドラマが起こっていました。チョークの製造工程はほ

とんどが手作業で、職人の技が際立って必要なのですが、彼らにはその能力がありました」。

普通の人では十五分、三十分が限界な細かな作業でも、彼らは特別な集中力を発揮し、数時間も続けることができた。また、普通の目視では見つけることができないチヨークの小さな気泡やびび割れ、欠けを見つけ出し、取り出すことができた。

会長の大山泰弘氏は言う。

「知的障害のある子供たちに健常者と同じ仕事などできるはずがない、と頭ごなしに考えていた私は、二人の少女を雇い、その人数を増やしていても、彼らの面倒を見ている、世話をしている、という意識が消えませんでした。その時、ある法事で臨席した禅寺のお坊さんの言葉が、私を奮い立たせたのです。そのお坊さんは私に、『人間にとって究極の幸せは四つです』と言いつつたのです。私はそれを書き留めました」。

一つ目は愛されること。

二つ目はほめられること。

三つ目は人の役に立つこと。

四つ目は人に必要とされること。

「障害者であっても、福祉施設で大事に面倒をみてもらうことが幸せなのではない。働いて人の役に立つことが幸せなのではないか、と考えたのです」。

その時の少女のひとり、林緋紗子さんは六十歳の定年を過ぎて、六十八歳になるまで白髪になり腰がまがってからも嘱託社員として雑務をやりながら、チヨークを作っていた。

実は、わが家の次男、武は知的障害者である。そのことは何度か『まんじ』にも書いたことがあるが、私の人生、喜怒哀楽のほとんどを彼と共にしている。その中で常に感じていたことは、何とか安定して働ける場所がほしいということであった。人として生まれて、社会へ貢献する道は普通なら「働くこと」である。それが賃金という尺度で測られ、水準に満たないと言う理由で切り捨てられる。

お給料は無くとも良いから「仕事」をさせて欲しいと言っても社会が認めなかった。とくに最低賃金法が問題であった。武が勤める社会福祉法人LMV (Little Movement Village) は、国や県からの援助を受けてはいないが、基本的には「働いて収入を得る」仕組みである。ところが、世の中に好不況があるように、いやそれにも増して社会福祉法人では、不況の影響をもろに受ける。国の定めた最低賃金を支払っていない、法人の運営が続けられない。結局は、就労時間を短縮して、時間給を切り下げるしかなかった。

いま韓国では文在寅大統領が、理想に燃えて、最低賃金を毎年十六%引き上げ、三年間で時給六四〇円から一〇〇〇円にする「所得主導成長政策」が進行中である。輸出主導の先進国追撃型成長を解消するためには、従来の産業中心政策では限界がはつきりしていることも事実だ。分配改善を通して家計で使える金を増やし、それにより、内需を刺激して雇用増につなげ好循環が生まれれば、韓国経済の新たなモデルになるかもしれない。

しかし経済学者は、「所得主導成長論」に否定的だ。経済理論に照らしてみると、学界で検証された理論もなく、話にならない、という反応であった。成長政策に所得主導成長論を実験する国は世界主要国のうち韓国が唯一である。

いわば経済学者から総スカンを食らっているのに韓国政府は強硬である。しかし一年間の成績表は惨めであった。

最低賃金引き上げは、経済的な弱者へ配分を多くしようという政策である。ところが、誰でもわかるように、最低賃金が引き上げられると、弱者の雇用を担っていた中小企業や個人企業が一齐に人員削減に乗り出す。そのために豊かになるべき低所得層は就業の機会を奪われ、逆に貧困を加速してしまう。それが韓国の統計で実証されたのである。

所得下位二〇%の「第一階層」の所得が前年同期比八%

減、下位二〇〜四〇%の「第二階層」の所得が同四%減になってしまったのに対して、上位二〇%の「第五階層」の所得は同九・三%増を記録したのである。まさにエミール・クーエの「努力逆転の法則」である。

関連して思い起こすのは江戸時代の雇用政策である。箱根の山も大井川も「駕籠」で越えていた。その頃、車や舟を知らなかったわけではない。本音は東海道の管理であろうが、人足の雇用政策の面も大きかったのである。

さて、小松成美氏の『虹色のチョーク』執筆の動機となった坂本光司氏の『日本でいちばん大切にしたい会社』（あさ出版）を覗いてみる。

もちろん小松成美氏の紹介と内容はほとんど異ならないが、中小企業経営論など経営者への啓発を主題としているので、論旨は判りやすい。坂本氏の著書は好評によりその後シリーズとなり三巻まで出ているが、その冒頭を飾ったのが「日本理化学工業」なのである。

ところが、その二番目に「伊那食品工業」が出ている。見覚えがあった。

『まんじ』同人発行人の三戸岡道夫さんがその著書『二宮金次郎から学んだ情熱の経営』（平成二十二年刊）で最初に取り上げた会社である。

伊那食品工業は「企業は社員を幸福にするためにある」と言う経営理念のもとで日先の利益は追わず、利益は社

員を幸福にする手段として、創業以来四十八年、連続して、増収、増益、増員という記録を打ち立てた寒天を製造する会社である。そのシェアは国内で八十パーセント、世界で十六パーセントだという（著書出版時）。そこにはまさに二宮金次郎の「遠きをはかる者は富み、近くをはかる者は貧す」を地で行く世界があった。

日本理化学工業の場合も、現会長の大山泰弘氏が聴いた禅宗僧侶のことば「愛されること、ほめられること、役に立つこと、必要とされること」が企業の理念となった。出典は何であろうか。どこかの経典に出ているのかも知れない。

しかし、インターネットまで動員して調べるが見つからない。見つかるのは全て日本理化学工業に関連した話題ばかりである。

その一方で、似たような言葉がいくつか見つかる。

山本五十六は「やってみせ言ってみせてみて褒めてやらねば人は動かじ」とか、「話し合い耳を傾け承認し任せてやらねば人は育たず」とか「やっている姿を感謝で見守って信頼せねば人は実らず」と言っている。組織を動かす原点のように思うが、どこかで禅僧の話に通じるイメージがある。

ほかにも自動車用品を販売するイエローハットの創業者・鍵山秀三郎さんの「一日一話」に「してもらう幸せ、

できる幸せ、してあげる幸せ、プラス一緒にできる幸せ」がある。

また慶応義塾大教授・前野隆司氏の「やってみよう！ありがとう！なんとかなる！あなたらしく！」にも同感するが、やはり障害者との関係では禅宗僧侶の言葉がいちばん響いてくる。

小松成美氏の『虹色のチョーク』は四年半も密着取材したノンフィクションである。障害者の働きぶりなどのエピソードが豊富である。

本田真士さんは「キットバス」のエースと称されている青年である。「キットバス」とは日本理化学工業が社運をかけて開発したヒット商品であるが、今その製造のリーダーである。

キットバスの担当以前はいつも始業時間ぎりぎりに出社していたのが、試行錯誤が多く工夫が生かされるこの開発商品が気に入ったらしい。出社時間がどんどん早くなり、ついには「エース」と呼ばれるほど開発に貢献した。昭和五十三年生まれで、平成十年に日本理化学工業の訓練生となった本田真士さんの母裕子さんの話が続く。長男として生まれた真士さんの幼い頃の症状は我が家の次男・武そっくりである。

言葉が遅い、三歳児検診では幼児相談室に通い医師の診断を受ける。「自閉症的傾向」との軽度な判定である

が、周りの子供と比較すると異常は明らかで有る。保育園ではトイレが不安で昼寝ができず、その間毎日家に連れ帰っていた。成長してからも人との会話ができない。転勤の多い家庭であつた上に、三男も自閉症の症状に加えパニック症状を持つ重度の障害児であつた。その上、真士さんが養護学校の高等部を卒業する頃、裕子さんは乳癌に罹り即手術、更に翌年に再発して抗癌剤治療と厳しい日々が続いていた。幼い頃から裕子さんの家事を見習っていた真士さんは、ある程度料理もできる。母親を助け、その難局を切り抜け、料理の腕も磨いた。母親としての焦燥感や将来への心配もあつたにちがいない。しかし、障害児を持つ母親達との交流を通じて裕子さんは強くなつて行く。

「成長と共に症状が消えてくれれば……と逃げていた時代が遠く思えます。……真士が、会社の役にたっている。皆に褒めて頂ける。働く喜びに満ちている。これ以上の幸福はありません」。

中村傑さんも平成十年入社で今はキットパスの検査担当班長である。母親の典子さんは長男の傑さんが四歳の時に離婚し、生まれたばかりの次男を連れて実家に戻り働きながら二人の子を育てた。歩き始めるのが遅く、言葉も遅かった。成長すれば解決すると思いながら、幼稚園入園、小学校入学の時期になると知的障害が明確になる。本田真士さんの場合とは違って自閉症的傾向はみら

れなかったが、中学校に入学する頃には普通学級は無理かも知れないと判った。しかし、一度特殊学級や養護学校に行ってしまうともう戻れない。「やれるところまでやつて、もう駄目だと思つたら向こうに行きます」と普通の中学校に進んだ。

ましてや高校は無理と承知しながら、この時期、家の近くの都立工芸高校で定員割れが発生して入学できた。子供の頃から絵が好きで、作為がなく屈託がなく流刺とした絵を描いていたので、工芸高校が性に合っていたが、就職となると現実には厳しかった。結局は知的障害を認めて、軽度障害者として養育手帳を取得し、神奈川県障害者職業能力開発校を経て日本理化学工業に入った。手先が器用で細かく地味な仕事を丹念にこなす傑さんは、性にあつた仕事に恵まれ、いまや卓越した職人そのものである。その間、いつも前向きな姿勢で、道を切り開いてきた典子さんはいう。

「こういう子をもつたら、誰だって絶対に、私のようになりますよ」と。

チヨーク押出し成形機を担当する菅井雅明さんは「暦の天才」である。入社日を聞けばすぐに平成三年三月二十六日と答える。西暦年月日を言えば即座に曜日と答える。カレンダーが頭の中にあるらしい。

障害者の中には、ある種の能力だけが特出している場合が多い。その特徴が生きる仕事に巡り会えると、健常

者をはるかに越える能力を発揮する。それが認められるとますます仕事に熱中する。

長々と日本理化学工業の障害を持つ方々を紹介した。抜き書きしながら、我が家の武に当てはまることが極めて多い。武の症状を障害年金申請書から書き写す。

幼児の頃から発達が遅く、「単語」を発したのが二歳半（健常児は一歳半）、「連語」を発したのが五歳半（健常児二歳半）で、歩くのもおそかった。

高層ビルの上階に連れて行くと這って歩くほどの高所恐怖性。幼稚園バスの出迎えにいつもの母でなく父が行くと異常反応を示し大騒ぎであった。

外出日や旅行日を異常に正確に記憶していて、カナー症候群やアスペルガー症候群の傾向がある。知能指数はばらつきが極めて大きく、言語領域に弱い、数的あるいは視覚的（認知的）領域では平均以上を示す。

もう少し補足する。視覚的（認知的）領域ではこんなこともあった。

まだ「連語」の能力の無かった四歳ぐらいの頃だったと思う。画用紙に向かって円と直線にひげのついたような絵を描いている。その時はわからなかったが、中央線と山手線を中心とした路線図であった。電車に乗るのが大好きであった。駅の路線図がそのまま残像として記憶されていたらしい。

予期せぬ事態には強い不安、混乱、焦燥を招き、自閉、執着が強い状態、いつも同じことを繰返したがる。いまでも、テレビ番組に関心あるうがなろうが、時間がくると決めたチャンネルに必ず回す。写真を撮るのが趣味で、外出すると、いつも同じところで同じ写真を撮るのかも必ず三枚ずつ撮影する。外出時には、バス、電車の乗り換え時に必ずトイレに向かって走る。毎年のことであるが、秋恒例の報道写真展や美術展は欠かさずに出掛ける。どの程度。理解できているのか分からないが、傍から見ていると同じ事を繰返すことに満足感があるらしい。

大きくなってひとりでバスや電車に乗れるようになるだろうかというのが最初の心配であった。しかし乗り物の大好きな武はあつという間にクリアーした。小学校高学年になるとひとりでどこにでも出かける。

ある時、一緒に連れ立って出かけた帰りに、大宮駅ではぐれてしまった。お金は持っているし、交通機関については私より詳しいので、それほど心配しなかったが、何とか探し出さねばならない。その時、構内放送があった。武から「行方不明になった父親を探しています」との呼び出しであった。立場がまったく逆である。

言語能力については、親子間のコミュニケーションさえも困難な状況が続いていた。社会福祉法人LMVでは、事業を支援してくれている企業の職員と一緒に作業する

場合があるが、いじめられたり怒られたり、時には暴力を振るわれ、頭に大きなこぶを作って帰ってきてても、家では何も話さない。しかし日常生活面では極めて勘の良い子なので大きな不便はなかった。

ただ、中学校に進んだ時には、日本語も出来ないのに英語の授業が始まった。せめて、読解の手助けにと、毎朝会社に出かける前に一時間ほど一緒に英語の教科書を読み続けた。その中に「黄色いハンカチ」という物語があった。

刑期を終えて、バスで故郷に向う男がいた。もし妻子が迎えてくれるなら、バス停の桧の木に黄色いハンカチを掲げて欲しいと手紙を送った。ハンカチが出ていなければ、そのまま通り過ぎる。そんな不安の中で男が見たのは、桧の木いっぱい結ばれた黄色いハンカチの群であった。毎朝、おなじところを読みながら、同じように感動した。そして武がはじめて普通の生徒なみの成績を得たのが苦手なはずの英語であった。

その上、幸いなことに図形問題や算数問題は意味さえ分かれば、クイズを楽しむかのようにして解ける。出来ないのは結局、言語能力に帰する問題であった。

高所恐怖性も家族旅行の時など吊り橋があると渡れまいと心配していたが、今は超緊張状態ではあっても何とかクリアできる。最近、旅行で全長四百メートルの三島スカイウォーク吊り橋に行った時など、途中までは確

かに一緒にいたはずなのに目的地に着いても居ない。途中から引き返してしまっていた。

妻の方針で、成人してから、独りで生活して行けるように、掃除、洗濯、炊事などは全て自分で出来るように指導していた。

朝六時半に家を出て、社会福祉法人L.M.V.に向かう武が、家族全員の朝食を作るようになってから既に二十年以上になる。今ではかなりの料理ができる。この一年間ほど妻が糖尿病とか白内障とか下肢静脈瘤とか背骨の圧迫骨折など相次いで寝込む中で、いまや私はいちいち武に聞いて家事を手伝っている。

家では、四人の子育ては全て妻にまかせ切りで、手伝うことも少なかったが、せめて妻の負担を軽減するために、武のことだけは常に心をそろえるようにしていた。そのため、武を巡ってしばしば生じるトラブル処理とか進路問題とかは私の最優先課題であった。

国家でも、外に共通の敵や課題を持つと内部がまとまるといふ。武の存在のおかげで、我が家もまとまっていた。たとえば、我が家では子供達に勉強を強要したことなど記憶にない。全て武が基準であった。それに比べれば、他の子供達など放っておいても育つという聞き直りだったのかも知れない。

時には、武の存在が、兄弟や妹にとって負担となつて

いたはずであるが、彼らもそのことを自覚し自ら処理してくれた。良い子供達であった。

妻と心がそろうのは、武を巡る喜怒哀楽の時であった。五歳になってやっと「連語」が出たと喜び、ある日いきなり「あいいうえお」五十音表を何も見ずに書いたとびっくりした。

学校では、勉強にもついて行けず、疎外されているのではないかと、妻が「学校つまらないでしょう」と聞く。「つまる」と答える。

普通学級に進めたのは妻の大きな功績だった。普通の子と一緒に育てるという信念にブレはなかった。中学校を卒業する頃からは、その方針に従って私がその実務を担当するようになる。

なんとか高校に進めようと飛び回り、少しでも担当の方々に理解してもらおうと、くどくどと説明する。しかし「そんなに心配なら他の道を」と突き放されて、はつとしたこともあった。

結局は、定員割れの県立伊勢原高校の定時制にやっと入学できた。家から通うのに片道一時間半はかかる。その頃、家の脇の市役所前大通りも夜十時過ぎになると真っ暗であった。その中で、市民会館前に二十四時間営業のロイヤルホストが開店する。

妻がととても喜んで。後年、ロイヤルホストの株を入手したのはその時のお礼のつもりである。

定時制に通う生徒には、職場に通いながら大学進学を目指す者から、武のように学業面での遅れによる者まで多様な構成であったが、先生の目が届く少人数のクラスであったのがとても有り難かった。その上、先生の中には、昼間の時間を自らの研究や趣味に当てるために、わざわざ定時制を志望している方もいて、総じて水準が高かったように思う。

しかし四年間の比較的恵まれた生活も終り、いざ就職となると順調には進まない。親としても、もう少し猶予期間を持ちたかった。厚生省に勤める友人や近くの職業訓練大学の教授などに話しを聞くと、相模原市内にある神奈川県障害者職業訓練校（現障害者職業能力開発校）を薦めてくれる。日本理化学工業のキットパス検査担当班長の中村傑さんも通った学校である。

その訓練生として訓練費を受給しながら一年間研修後、K社の伊勢原木工所に初任給一〇万円ほどで入社した。会社の創業者が福祉事業に理解のある方で同工場内には神奈川県として始めての平成三年設立の社会福祉法人LMVが同居していた。木工所の作業の内、障害者でも出来る部分を担当する組織であった。

最初はK社に就職したのであるが、平成四年になると木工所の都合で給与はそのままという条件で、社会福祉法人LMVに移籍することになった。それ以来二十七年間にわたりお世話になっている。

働いている障害者は平均して十五人ほどであるが、設立当初に二十歳前後で入所して以来、ずっと通い続けている者が大半である。幼い頃から養護学校などでの密接な親子関係の延長で、設立当初から自然に障害者たちの父母会が出来上がっていた。もちろん、出席するのは全て母親である。その中で父親が主に出席したのは我が家くらいである。その父母会も、みんな老齢化が進み、今ではぼつりぼつりと欠けて行くが続いている。

社会福祉法人の運営は平坦ではなかった。法律により、理事長や理事、評議員などがある。施設の実務運営担当者を施設長というが、いわばスポンサーのK社の景気動向や首脳陣の意向が大きく反映される。この三十年間近く、五代の理事長、六人の施設長のお世話になっているが、その人選にはK社の意向が大きく反映された。

小さな社会福祉法人であるだけに、いやそんな特殊な事情を抱えるが故に葛藤が生じる。国の社会福祉行政の変更や景気変動は総じて法人の運営に困難をもたらす。

当初の給与、最低賃金制を守っているのは「倒産」するしかない。著しく労働能力の低い障害者には、最低賃金の減額特例が認められているので許可を申請し、勤務時間を短縮して、実質賃金を半減するしか方法が無く、現在に至ってもなかなか回復出来ずにいる。

そのような苦難の中でも、この三十年間ほとんど欠か

さずに続いているのが春の一泊バス旅行である。一泊という制限内であるが、東京から二百キロ圏内の観光地、保養所はほとんど回った。原則として家庭からも誰かが同行している。

二、三十年前と言えば、会社における社員旅行が衰退に向かった時代であった。若者たちは職場の延長線上の社員旅行を好まなくなっていた。その中で、保養地に宿泊しバスで観光地を回る。今になって思い出すと、まるで会社の社員旅行を五十年間以上も続けていたような気分である。

ちよつと宿泊所を並べて見ると、富士ハイツ、熱川ハイツ、三河ハイツ、鹿島ハイツ、諏訪湖ハイツ、山梨年金会館、静岡年金センター、千葉年金センター、休暇村南伊豆、休暇村伊良湖、健保しなの苑、休暇村那須、国民宿舎紅竹、かんぼの宿焼津など、いずれも障害者割引が利用できる安価な所を利用している。

バスは神奈川県福祉バス、設備の整った「ともしび号」を利用することが原則であるが、二倍以上の競争率なので抽選に外れると「中型バス」となり、計画変更が必要になる。だから抽選結果に一喜一憂していた。

旅行のコースに入っている観光施設等では、母親達のグループの邪魔にならないようにと、私は別行動をして園内をもつぱら歩く。また宴会翌朝、朝湯を浴びたあと

朝霧のなか、宿の周りを一時間ほど散歩する。不案内な土地なのにいつもの癖で最短距離を歩いて帰るつもりで迷い、朝食に遅れそうになったこともしばしばある。いまでもふっと思ひ出すと懐かしい。

母親主体の参加者のなかで、時には父親も参加する場合もあったので、男性の参加者は二、三名程度、福祉法人からは理事長や施設長にスタッフの皆さんも必ず参加する。理事長や施設長と同室となるのは大抵父親達である。

当然、お酒が入っているので、家で何も話さない武の就業状況についても遠慮のない話が聞ける。また法人運営の厳しさ・難しさや人間関係もそこに見てとれる。

母親群も毎年のことなのでグループを形成してさながら同窓会のようなものである。

いつの頃からだったろうか、宴会の後、必ずカラオケ大会が始まるようになった。

とにかくびつくりしたのは我が家の武が真っ先にマイクを握るのである。音楽好きは知っていたが、家の生活からはとても想像できなかった。いや武ばかりではない。ほとんどの障害者が我先に歌うのである。

ところが、ほぼ全員、全く音程がとれていない。唱歌とか演歌など、リズムや音程のとりやすい曲を選べば良さそうなものなのに、みんなボディーアクション付きで

やたら早口の難しい曲を歌う。耳に障害があり、発声が困難な者さえ、いきいきとしている。

何かの事情でカラオケ大会の時間が制約された時などカラオケが出来ないなら参加しないという者まで生まれるほどであった。常日頃、感情をアウトプットする機会の少ない反動なのであろうか。やはり誰もが認められたのである。

理事長や施設長らと親しくなったせいもあるが、法人で何か企画する時にはいつも声をかけられる。そんな時には、韓国の大学にいる時も最優先で駆けつけた。

社会福祉法人として、県福祉部などへのPRであろうか、創立十周年記念誌をつくりたいと言う。三十頁ほどの小冊子ではあったが、全て手製のものである。

新聞作りとか雑誌作りとか原稿書きは、私のいわば「お手のもの」である。パソコンも手慣れている。カラー印刷も使って、見栄えだけでも整えると、障害者とその父母が発行したということでもなかなか好評であった。理事長や施設長も県福祉部やK社の幹部、そして交流のある同種の施設に配り面目を施す。

そうすると十五周年記念誌、二十周年記念誌、そしておそらく三十周年記念誌も欠かせず、全てにお付き合いすることになるだろう。

その上、記念誌発行に前後して、県福祉部や伊勢原市

の行政関係者、K社の経営陣、それに仕事面で世話になつてゐる伊勢原作業所の従業員などを招いて記念パーティーも行うのでそれも手伝う。

記念誌の発行で、困難があつたとすれば、障害者やその家族から原稿を集めることであつた。内容から見ると、障害者にとつて年一度のバス旅行が如何に大きな楽しみであるか良く判る。家庭での生活ぶりや意外な趣味も伝わってくる。原則として手直しはしないが、それでも十分に形になる。

バス旅行や記念誌発行を通じて、障害者と三十年近くおつきあいしていると、本人やその家族環境も良くなるようになる。

顔付きや身動きに不自然さなどなく、会話もごく自然で、どこに障害があるのかと思う者が、仕事の面ではむしろ評価が低いという。集中力が維持できないらしい。

中にはカラオケ大会にいつも女装で登場する障害者もいる。母親と父親を相次いで亡くし今ひとり暮らしをしているが、物持ちで旅行には必ず大きなバックを持ってくる。自分が言いたいことを何回も何回も同じ言葉、大声で繰返すので仲間達には不評である。おそらく言っていることが伝わっているか不安な心理状態が習慣化したのであらう。

旅行の時に武が撮った写真を見ると、歴代の理事長、

施設長やその他のスタッフ、仲間の障害者の枚数に大きな偏りがある。彼が心易い方か気に入つた仲間ばかり撮っている。

大まかには、似た障害を持つ者同志の交流がスムーズなようで、それなりの社会が構成されている。

自閉症の傾向のある障害者はどちらかというとプライドが高い。武も当初のK社所属から社会福祉法人LMV所属に変わった時など、LMVの制服が気に入らず、ゴミ箱に捨ててしまい始末書を書かされたことがあつた。

仕事の面では、武の数的な能力が生かされた「材料取り作業」が大変気に入つていたようであるが、その製品の受注が無くなり別の作業に移った時など、落胆して精神不安定になつてゐた。普通のサラリーマンと何も変わらない。

武の場合、「普通の子と一緒に育てるという」妻の信念で、福祉法人LMVに世話になつてからも障害者という状況に甘えないようにしていた。そのため障害者年金の申請も入所二〇年間もしなかつた。

ある時、施設長から「どうして障害年金を申請しないのですか」と言われた。ここで働く障害者は武以外全員障害者年金を受給していると言う。

今は良いとして、武が独りで生活して行く時に備え、親としても障害年金を受給できるようにすべきではない

か。若干の戸惑いもあったが、障害年金の申請をしたのは七年ほど前である。

ところで、いざ申請書を書く段になると、あれも出来る、これも出来ると書きたいが、それでは受給資格を取れないであろう。だからと言って、何か劣っている点を列挙するばかりでは憂鬱である。しかし武の仲間達は全員受給しているというのに、武だけ資格を取れなければ、私の責任のようにも感じる。

障害年金申請の際に、役だったのは、妻の詳細な育児記録である。障害年金申請書に書いた「単語」を始めて使った日、「連語」を始めて使った日など全てがその記録のおかげであった。それと共に、武の場合、分野によって能力差が極度に大きいことも冷静に認識できた。

障害年金は月七万円ほどでおそらく生涯受給できるであろう。既に七年間で六百万円ほど通帳に振り込まれているが、わが夫婦の「経済」の内はおそらく取り崩すこととはないであろう。通帳の左欄（お引き出し金額欄）に数字の記入のない珍しい通帳であるが、まだ武には伝えない。

その一方で、親として心配な事は武が将来「金銭面で騙される」ことである。そのことに少しでも抵抗力を付けるため、LMVの給与は最初から全て本人の管理に任せている。時々チェックするとわずかずつではあるが、定期に組み入れているようである。

14

前にも述べたが、今や武は我が家の主役である。身長は一七六センチ、体重は六二キログラムあり「会社」で毎日作業をしているので体力もあり、家庭の大工仕事くらいなら何とかこなせる。その上、毎日の朝食の準備を通じて料理も出来るし、必要な野菜類や肉類・魚類の買い物も出来る。

そうなんと自然と自信を持ち、態度も大きくなる。

まず、朝の挨拶「おはよう、ありがとう」で始まる。朝食の準備の中で、毎朝コーヒーとスープをいれて私の書斎に運んでくれるからである。

次には朝食。私の出来るのは食器洗い位であるが、それでも武の指示を受けることが多い。今や我が家で最も「役立っている、必要とされている」人物なのである。

その上、もともと幸の薄い生れだったので、親として格段に「氣遣って」育てたのが武である。いわば夫婦とも見かけ上は最も武に「愛」を注いでいた。

禅宗の僧侶の「四つの幸せ」すなわち「愛されること、ほめられること、人の役に立つこと、人に必要とされること」が期せずして、我が家の小さな世界で実現しているのである。

私は現役の頃から、いつもこんな事を言っていた。

「ただ働き」というと損をした感じだが、「ただ遊び」と言えば得をした感じである。だから会社で楽しく仕事をしている者はその分、お給料は安くても良いはずだと。「それなら新井さんはお給料はいりませんね」と言われてしまった。

もちろん「働くこと」は「稼ぐこと」であるが、社会からの評価を受ける機会でもある。若者達の就職難は、評価の高い企業ばかりを狙うことにもある。今やNPO法人が一定の評価を受けつつある時代である。考えてみれば、公務員とは巨大NPOの従業員である。日本では明治来、国家公務員を供給するのが帝国大学の役割であった。

仕事のあるから「褒められ」、「役立てる」「必要とされる」と感じる事が出来る。そこで思う。労働とは社会参加権である、賃金ではない。

このエッセイを書きながら、たまたま長寿テレビ番組の『イタリアの小さな村』を見ていた。

八十歳を越えた平凡な老人がすばらしい哲学を語る。

「人生は短じかすぎる。私はもっともっと働きたい」。

もちろん、ここで働くという意味を「稼ぐ」と捉えるとは違いで、今まで育ててくれた世の中に、習熟した技術で、少しでもお返ししたいということなのだ。

この番組では、誰もが平凡な言葉で哲学を語る。イタ

リア人がみんなそうなのか、あるいはプロジューサーの演出なのかわからないが、いつか『まんじ』に「小さなイタリアの村」の「語録」でも紹介してみたい。

そんなことを思っているところに、三日間行方不明だった山口県防府大島町の二歳の坊やが無事に発見されたニュースが飛び込んできた。

ヘリやドローンまで使った搜索の中、四日目の早朝からボランティアとして搜索に参加した尾畠春夫さんがわずか三十分ほどで家から数百メートルの山中で坊やを発見したという。

びっくりしたのは、七十八歳の尾畠さんのボランティア歴である。新潟の中越地震以来、東日本大震災、熊本地震、今年に入っても耶馬溪土砂崩壊、西日本豪雨と休む間もなく軽ワゴン車に装備一式を積み込んで出勤する。相手側には一切負担を掛けないのが信条で活動費は年金から捻出しているという。

ここでも「もっともっと働きたいのです」という言葉が聞こえるようである。

禅僧の紹介する「四つの幸せ」を「人に必要とされる、人の役に立つ、褒められる、愛される」と読むとボランティアの「幸せ」になるように思う。